

2024年3月10日（日）

「通時コーパス」シンポジウム2024

副詞的に機能するコピュラ文

－「～はさらなり」「～はおろか（なり）」－

北崎勇帆（大阪大学）

1. 問題の所在

- 本発表では、以下のような「～はおろか」の構文の発達を中心に扱う。
 1. a. 梅雨らしいジメエ～とした陽気。職場内はクーラーはおろか、除湿もかからないので、もう劣悪な環境と化しています。社員の勤労意欲を高めるためにも、空調は常時運転できるようにしといてよ。（Yahoo!ブログ [2008] OY14_08105,430）
 - b. このサイトでは撮影地は県名はおろか地方も明かさないし聞かないことになっている。貴重な野草の盗掘を防止するためなのである。（Yahoo!ブログ [2008] OY03_04415,4350）
- 澤田（2006）…「スケール隔たり構文：話題にされた既存命題に対し、そこから尺度上で心的に大きく隔たっている新情報命題を持ち出すことによって、既存命題の妥当性に異議を唱える構文。」
- 服部（2006）…（「どころか」との対比の中で）「AはおろかB」では、Bの部分は「Xも（でも、だって、さえ、すら、まで等）Y」のような形をとり、「Aに比べてYを成立させにくいとみなされるXについてなおYが成立することを表わす。」
- 藤田（2013）…「「AハオロカB（モ／サエ等）Xシナイ（／Xデナイ）」といったパターンで用いられ、大略「Xスル（／Xデアル）」ことの実現可能性の低いAとそれよりは実現可能性が低くないBとを対比して、「AについてXスル（／デアル）ことが実現することは言うまでもないこととして、BについてもXスル（／デアル）ことが実現する」といった関係を述べる」
 - a. 空調の質素さのスケール：冷房<除湿（<送風）
 - b. 撮影地の詳細さのスケール（＝公開の差し支えなさ）：県<地方
- 副詞節・等位節が生まれるプロセスにはいくつかのパターンがあると考えられるが（竹内2007、仁科2016などに基づき、北崎2024）、
 - 関係節由来：

- 準体句+格助詞：ニ・ヲ・ガ・カラ・デ、ノニ・ノデ、…
- 連体修飾節：タメニ、ママニ、アイダ、トコロガ・トコロデ、クセニ、サカイデ、セイデ、…
- 節並置由来：不十分終止（終止形節）、ヤラ・カ（間接疑問）、（デ）アレ・テミロ（命令形節）、～ワ～ワ、…
- 既存形式由来：トモ、テモ、タラバ、ケレドモ、…
- この「おろか」の位置付けは、以下の点で問題となる。
 - 1. 典型的な副詞節を構成する要素を末尾に持たない。
 - 2. 現代語の「おろか」の語義からは「言うまでもない」に相当する意味が導きにくい。
 - 小柳（2019）は、副詞が形成される統語的な条件に「連用修飾機能の獲得」があることを述べ、その方法・プロセスに「（名詞からの）連用修飾語の造語」（～に、～と、重複など）、「挿入句経由」、「連体修飾句経由」を挙げる。「おろか」は名詞ではないが、一方で、「～はおろか。」というような挿入句は古代語にはない。
- 「おろか」の語誌的記述には、辞書類や我妻（1991-1995）があり有益であるが、構文の形成過程はよく分からない。まずは次節で「おろかなり」を含めた「おろか」類の通時的な調査を行い、構文の発達の過程を検討した上で、その後、類似形式も含めた当該構文の位置付けを考える。

2. 用例概観

- 以下の調査による。
- 『日本語歴史コーパス』（CHJ）：語彙素読み「オロカ」
 - a. 平安時代編Ⅰ
 - b. 鎌倉時代編Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
 - c. 室町時代編Ⅰ・Ⅱ
 - d. 江戸時代編Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
- このほか、近世語の調査は以下で補った。
 - 国会図書館デジタルコレクション：<https://dl.ndl.go.jp/ja/>
 - 日本古典文学大系（岩波書店）、嚙本大系（東京堂）
 - その他索引・叢書類

- 前提として、「おろか」の意味は大きく以下の2つに分かれ、前者が古く、後者は後発的である（『日本国語大辞典（第2版）』、『古語大鑑』による）。
 - a. 「（認識が）不十分」の意（≒現代語の「おろそか」）
 - b. 「頭の働きがにぶい」の意（≒現代語の「おろか」）
 - 「中世以後には、愛情や誠意の不足を言う用法を専ら「おろそか」が担うようになり、「おろか」の意味領域は㊦㊧の用法（注：思慮・分別が足りないさま。愚鈍であるさま。）へと収斂していった。」（『古語大鑑』「おろか」の項）
- 2. a. おろか [於呂可] にそ我は思ひし乎布の浦の荒磯の巡り見れど飽かずけり（万葉集・巻18-4049・10-万葉0759_00018,4890）
 - b. 三蔵ノ宣ハク、「汝乎等極テ愚也。我ガ敬フヲ『様有ラム』ト不思シテ謗ルガ、知ノ無キ也」（今昔物語集・巻11-14・30-今昔1100_11004,9500）
- 「～はおろか」の構文と意味的に近接するのは特に、前者（a）のうち、「（「…と言えは」「…と言うも」「…とは」などの後にきて、その形容、その表現が不十分であるさま）…と言うのでは不十分。…どころではないさま。」（日本国語大辞典）、「表現が不十分であるさま。言葉が足りないさま。多く「～と言へばおろかなり」「～とはおろかなり」などの形で、「～という言葉では言い表せないぐらい～である」「極めて～である」などの意を表す。」（古語大鑑）の意。
- ひとまず、以下の観点に注目して用例を概観する。
 - 主題化の方法：～といえは、～とは、～は、…
 - 何をとりたてるか
 - どのような形態をとるか：おろかなり、おろかのこと、おろかの、…
 - 対比される要素の（明示の）有無

2.1 中古

- 上に引いた通り、「～と言えは／言うもおろかなり」「～とは／ともおろかなり」などの構文を取り、「～と表現するのでは不十分である」ことを述べることで、程度の甚だしさを示すのが典型例。
 3. a. 「この風いましばし止まざらましかば、潮上りて残る所なからまし。神の助けおろかならざりけり」と言ふを聞きたまふも、いと心細しと言へばおろかなり。[…歌]（源氏物語・明石・20-源氏1010_00013,20180）
 - b. 女、あさましく、わびしうかなしうて、ただ泣きに泣かれて、いかに聞き

たまひたるならむ。いみじとはおろかなり。(落窪物語・巻1・20-落窪0986_00001,294100)

- 現代語の「～はおろか」が名詞句を項として取るのに対し、当期の「おろか(なり)」は形容詞文や、スケール性を持つ動詞文を引用節として主題に取る。
 4. a. これ二人をなむ、「父[権帥] かなしくすとはおろかなり」と言ひける。(落窪物語・巻4・20-落窪0986_00004,143310)
 - b. 北の方、<今宵なむ、帰りたまひなむ>とする。[四の君が] 出でたまひけるを見て、母北の方、泣くとはおろかなり。かなしうする女になむありける。(落窪物語・巻4・20-落窪0986_00004,188180)
- このことに起因して、当期の「おろか」は対比される対象が明示される例が見出しにくい。
- ??心細いどころの話ではなく、もっと心細いのだ。

2.2 中世前期・後期

- 中古の「～と言えばおろかなり」と同様の例は引き続き見られる。
 5. a. 然レバ、生ナンズルニヤト思ニ喜キ物カラ、不堪敢心ヲ静テ見レバ、目ヲ細目ニ見開タレバ、[甥子が生きているのを確認できて] 喜シトモ愚也ヤ。(今昔物語集・巻26-5・30-今昔1100_26005,44280)
 - b. かくて万の事、たのもしといへばおろかなり。(宇治拾遺物語・巻1-18・30-宇治1220_01018,36220)
 - c. 「もしや」と[女を] 待ちけれど、夜ただふけにふけぬれば、かくてあるべきやうもなければ、装束をいだきて逃げにけり。うしろはづかしく、あさましともおろかなり。(十訓抄・巻1-43・30-十訓1252_01043,16070)
 - d. 引き倒されぬべきを、構へて踏み直りて立てれば、強く引くともおろかなり。引き取られぬべく覚ゆるを、足を強く踏み立てければ、かたつらに五六寸ばかり足を踏み入れて立てりけり。(宇治拾遺物語・巻14-3・30-宇治1220_14003,6370)
- 「おろか」が名詞句を取る例は中古には見られなかったが、当期には、名詞化した形容詞を中心に、名詞句を取る場合がある。
 6. a. 行幸の儀式のあさましさ、申すもなかなかおろかなり。(高野本平家物語・巻8・30-平家1250_08010,31190)

b. 十善帝位の御果報申すもなかなかおろかなり。雲上の竜くだって海底の魚となり給ふ。（高野本平家物語・巻11・30-平家1250_11009,10500）

- 以下の例は、後続部に「対比されるB」が示されているようにも読める。

7. a. 郎等本ヨリ憎ム心ニテ、拈（シタタ）ムナド云へバ愚也や、四ノ枝ヲ張り付タリ。二ノ足ニハ吉ク械ヲ打テ、二ノ手ヲバ、上ニ大ナル木ヲ渡シテ、其レヲ_レカセテ縛リ付ケツ。髪ヲバ木ニ巻キ付テ、其ノ上ニ多ク昇セ居ヘテ令守ム。（「縛っておく」／「両手両足を磔にする」）（今昔物語集・巻13-18・30-今昔1100_13038,2370）

b. 「然ハ何事カ云ツル」ト問ヘバ、妻、経方ガ彼ニテ云ツル事ヲ一言モ落サズツラ / \ ト云フニ、経方ガ夢ニ見ツル事ニ露違ネバ、経方、怖シトモ愚也や、_レテナム有ケル。（「恐ろしい」／「（呆れている）」）（今昔物語集・巻31-11・30-今昔1100_31010,9160）

c. その時、足にまとひたる尾を引きほどきて、足を水に洗ひけれども、蛇の跡失せざりければ、「酒にてぞ洗ふ」と人のいひければ、酒取りにやりて洗ひなどして後に、従者ども呼びて、尾の方を引き上げさせたりければ、大きなりなどもおろかなり。切口の大きさ、径一尺ばかりあるらんとぞ見えける。（宇治拾遺物語・巻14-3・30-宇治1220_14003,8810）

- 中世後期には大きな変化はないが、「おろか」が取る形態において、「おろか+コピュラ」以外に「おろかな／のこと+コピュラ」が新たに見られる。

8. a. 形見こそ中々今は徒なる事よと言うて、伏しまろうで泣かれたれば、幼い人々も声々に泣き悲しまれた体、申すも疎かぢや。[voroca gia]（天草版平家物語・巻1-8・40-天平1592_01008,18050）

cf. おさなき人々も、声々になきかなしみ給ひけり。（高野本・巻2）

b. 「其事でござる、天下おさまりめでたいおりなれば、都のにぎやかさ、申はおろかにござる（虎明本狂言集・二千石・40-虎明1642_02013,7960）

9. a. その体哀れなと言うも疎かな事で御座る。[yū mo vorocana coto de gozaru]（天草版平家物語・巻1-3・40-天平1592_01003,46700）

b. 「されば其事でござる、天下おさまりめでたきおりなれば、男女によらず、月見の花見のとあつて、あなたへは、ぞろり / \、こなたへはぞろり / \ と仕て、にぎやかさ申もおろかな事でござる（虎明本狂言集・坊々頭・40-虎明1642_02016,1140）

2.3 近世

- 近松世話物に、現代語と同様の構成要素から成る、「～はおろか、～」が現れる。名詞句を「は」で主題化し、コピュラを伴わず、後続部に比較対象が示される点、現代語と共通する。
 10. a. オオそれ / \ . お蝶の父の言やる通り、一を打つて万を知れ。琉球屋の新兵衛様といふては、お国はおろか筑紫九ヶ国隠れない分限者に餅搗く白、杵持たずに、晒白を兼ねるほどなしはん坊（薩摩歌・51-近松1704_06002,7760）
 - b. 玉「…一度が定、おさん様に告げて、どこもかしこも紫色になるほど抓らせませす。以春「アア、うるさや。と振り放す。どつこいやらぬ。本妻の愠気と饅飩に胡椒はお定り、なんとも存ぜぬ。[つねられて] 紫色はおろか、身内が樺茶色になるとても君故ならば厭はぬ（大経師昔暦・51-近松1715_23001,17670）
 - c. さあらぬ詞やはらげて。岩木はおろか真綿の我ら。ふはと心はうかるれどもしいた跡へ奥が来て。扱は外えの悪性と愠気のかほばせ見る様な。いかゞせんと有ければ、…（日本傾城始 [1720演] 紀海音全集5-236）
 - d. はだかはおろか水のそこ氷のうへにねるとても。ねがいさへ叶ふならつかへに針をすることし。殊更もつて女郎は殿ゆへ恥もいとはぬと。（傾城国性爺 [1735演] 紀海音全集3-319）
- こうした例は中世後期には見出せないので断絶があるように思える。浮世草子・噺本類には、「～は言うもおろか、～」の例が少数ながらあるので、主題化の方法についてはこれを中間的な段階と見てよいか。
 11. a. かの人聞召、もつともそのほうのおほせあるとをり、かやうに豊なる御代なれば、上々かたは申もおろか、たみ百しやうあきんどまで、あんらくにくらす事じや。（宇喜蔵主古今咄揃 [1678刊]）
 - b. そののち、菊屋申は、此ふるき戸帳を申うけ、京の三十三所の観音へかけたきといへば、安き事とて、つかはしけるを、残らず取てかへる。此唐織、申もおろか、時代わたりの柿地の小釣、浅黄地の花兎、紺地の雲鳳、其外も、模様かはりぬ。（日本永代蔵・巻3 [1688] 新編西鶴全集 p.163）
 - c. 「いかにも / \ さふこそあるべし。しかし只今是へ参りがけに、紋所に紅葉を付たる女郎に行合いしが、慥お宿へお歸りと見へたれば、今宵その君を此所へ是非に迎へまして」と頼む。「それは高雄さまとて、東三十三ヶ國に

隠れもなきはやり女郎、俄と申は愚か、今から申込置ましたらば、來年の今時分首尾いたしませふ。（傾城禁短氣 [1711刊]）

- 「～はおろかのこと、～」も同時期に現れる。

12. a. 冥加ないとも忝いとも、お前に礼を言ふ言葉日本はおろかのこと、唐、天竺にもよもあるまい（博多小女郎波枕・51-近松1718_04003,22720）

b. 現世の逢瀬かなはずは。刃に死してこの世を去り。極楽、諸天はおろかのこと、たとへ地獄の底までも。誘へ、伴へ、連れだてと。（けいせい反魂香 [1708演] 新全集p.236）

cf. げんぜのあふせ叶はずば。やいばにして此世をさり。ごくらく諸天はおろかのことたとへ地ごくのそこ迄も。さそへつれだてともなへと手に手をとつてゆくもかへるも。あふさかのせきも此身はとゞめゑぬ。（鎌倉三代記 [1716演] 紀海音全集4-228）

c. この小むつを置き去りに親子夫婦四人連れ。唐へ身代引く気ぢやの。あんまりむごいつれない。なんの見落ち仕落ちがある。唐高麗はおろかの事、天竺雲の果てまでも。ともに連れんと言ひ交した二人の仲。（国姓爺合戦 [1715演] 新全集p.285）

d. 一けをすてうかれ出ならさんがいはおろかな事。ゑぞ松まへのはて迄もともにつれんといゝかはした。（傾城国性爺 [1717演] 紀海音全集3-308）

- 「おろかのこと」→「おろか〇」というような関係ではない。

- 以上の例は、構文の構成要素は現代語と共通するものの、否定形式と呼応しない例が一定数ある点、現代語と異なる。

- 「Yは否定形式であるか、または、形式的に否定でなくとも…何事かの不実現を表わす述語であることが多い。」（服部2006：190）
- 「「肯定的格上げ」の「はおろか」文を不適格であると判断する人もいる」（澤田2006：248）

- なお、後続部のない「言うはおろか」にも、コピュラを伴わない場合がある。

13. a. 大臣「つねの物日でさへりちに居るは悪かる。まして正月の、節句の、七月などはきのどくに思やろが、なんと其日をつとめてやるはうれしいか」はつせ「いわんすが管でござんす。つねの紋日でも、お茶でいますれば、憂きもつらきもとゞめる事とござんす。まして正月や節句、七月はいふはおろか。嬉しうなふて何としましよ」（難波鉦・巻1・大番・岩波文庫 p.42）

b. 「されば 此おやしきの おひめさまが、けふはおふくろさまの三ねんきじやによつて おはかまいりなされ。おかへりをみた。それは / うつくし

いといふはおろか。われにみせたらめをまはそふ」（相州亀谷一本鎗 [1714
刊] 古典文庫176-12)

3. 小括

- ここまでのまとめ
 - a. 主題化される要素：
 - i. 形容詞（名詞化したものも含む）・形容詞の修飾を受ける動詞述語文など、明示的なスケールの有るものから、
 - ii. 明示的なスケールのない名詞句へ
 - b. 主題化の方法：
 - i. 引用の有無
 - 1. 「発話・思考動詞＋条件形」「引用助詞＋は」から、
 - 2. 「名詞句＋は」へ
 - ii. 草子類の「～は申すもおろかなり」は、(a)「主題化される要素」については移行後、(b)「主題化の方法」は移行前の、中間的段階？
 - c. 対比される項の明示：
 - i. 院政期にはそう「読める」例がたまに現れるが、
 - ii. 対比項であることが明らかな例は近世になってから？
 - これは、(a)の「主題化される要素」自体がスケールを表す場合は、「～と表現するのでは不十分である」ことを述べるだけで事足りるが、名詞句など、あるスケール上に乗る要素である場合には、主たる主張の部分が後続部に要求される、ということか。
 - d. 「おろか」の形態：
 - i. 「おろか＋コピュラ」から
 - ii. 「おろか〇」へ
 - とすると、漢語系副詞に見られる「に」の脱落のプロセス（濱田・井手・塚原1991、鳴海2015など）は想定できない。また、「おろかのこと」→「おろか」のような変化でもない。
 - e. 述部の意味：
 - i. 当初は否定・非実現との結びつきが現代語ほどは強くない？

- 対比項自体は「おろか（なり）」の意味が要求するものと考えてよさそうだが、スケール性が明示的でない名詞句を取るようになる点などは、急な変化であるようにも思える。
 - 他の形式からの影響は考えられないだろうか？という観点に基づき、意味的・（構成要素の）構文的な近さから、「さら（なり）」と「勿論」を検討する。

4. 類似形式

4.1 「さらなり」

- 「言うまでもないさま。当然のさま。」（『古語大鑑』「さら【更】」の項）
- 中古に現れ、「おろか」と似た構文で用いられるが、基本的に名詞句を取り、後続部と意味的な関係性を持つ点、大きく異なる。
 14. a. とくゆかしきもの […] 人の子生みたるに、男女とく聞かまほし。よき人さらなり。えせ者、下衆の際だになほゆかし。除目のつとめて。かならず知る人のさるべきなきをりも、なほ聞かまほし。（枕草子・153・20-枕草1001_00153,510）
 - b. よろづの事よりも情あるこそ、男はさらなり、女もめでたくおぼゆれ。（枕草子・251・20-枕草1001_00251,180）
 - cf. されど、わが得たらむはことわり、人のもとなるさへにくくこそあれ。（枕草子・244・20-枕草1001_00244,860）
- CHJ室町時代編には例がなく、『日葡辞書』にも「さら」としての立項はない。

4.2 「勿論」

- 高橋・東泉（2019）に、名詞述語用法（～勿論也）が早く、副詞用法が遅いことの報告がある。
- 抄物には以下のように、文副詞の例（b）だけでなく、副詞節を作る例（c）も見られる。
 15. a. 又今度山門ノ御訴訟、理運之条、勿論二候。御聖断遅々コソ、余所ニテモ遺恨二候へ。（延慶本平家物語・第1本・95-5）
 - b. [父兮生我（父・我を生む）母兮鞠我（母・我を鞠（やしな）ふ）] 母こ

そ生、父は生ぬが、血気をうくる程に、生だと云たまでぞ。母の養は勿論、乳をのませて養程にぞ。（毛詩抄・巻13・3-157）

c. 満室堆席（室に満ち席に堆（うずたか）し） 家ノ中ニモタチロシ ムシロタ、ミノ上ニモタントアルナリ（句双紙抄・4ウ）

16. a. 下立売を堀河へ引き回したる角屋敷。刀屋石見某とて、諸役御免の受領職。折紙太刀の御用まで、御所はもちろん、屋敷方。（長町女腹切・51-近松1712_09001,1140）

b. 幼少より他国に育ち。当御代の御風儀知らぬは理り。料理はもちろん。衣類、諸道具すべて、無益の費えお嫌ひ（心中宵庚申・51-近松1722_21001,18140）

- 古記録にはそれより早く、対比性のありそうな例がある（ただし「論なく」などの可能性はある）。記録語の口頭語化（堀畑2007：第1部第5章）のケースと見ればよいか？

17. a. 二罪以上俱発者、以重可論之条勿論、所詮云以前罪条、云此沙汰、一度ニ可有仗議歟、（民経記・文永4年11月6日 [1267] ）

b. 抑親房朝臣一昨日・両度召具水干舎人二人、□色、古サマハ勿論、建長制符以後無此事、是大納言入道今案歟、随分刷由也、（実躬卿記・嘉元3年1月6日 [1305] ）

5. まとめ

- 「おろか（なり）」「さら（なり）」「勿論」など、取り立てられる要素が基準を十分に（もしくは過度に）満たす／満たさないことを表す形式は、論理的・語用論的な含意を生み、後続部での説明を要求する。語彙的意味がいわゆる「不十分終止」（小田2006）を起こしやすいものと考え、この点で、命令形条件文、間接疑問文などと同様の、文並置のパターンの中に位置付けられる。

- ただし、スケールそのものに言及する場合（典型的には形容詞）と、あるスケール上に乗る要素に言及する場合（名詞句）があり、前者の場合は含意が明確であるので、不十分終止が起きにくい。

- （英語の let alone の場合は X let alone Y における X が「強い命題」になるが（Fillmore et al. 1988, Cappelle et al. 2015）、「おろか」構文の場合は後件が中心的な主張である。）

- 一方、「N1はおろか、N2も～」の構文の成立は、「おろか」単体の発達だけでなく、他形式、特に「勿論」からの影響を想定するほうがよいか。

参考文献

- 我妻多賀子（1991-1995）「オロカとオロソカ（その一～五）」『学習院大学上代文学研究』16-20.
- 小田勝（2006）「不十分終止の句」『古代語構文の研究』おうふう.
- 北崎勇帆（2024）「日本語史における節連結の類型」令和6年度大阪大学国語国文学会発表資料. [\[PDF\]](#)
- 小柳智一（2019）「副詞の入り口：副詞と副詞化の条件」森雄一・西村義樹・長谷川明香（編）『認知言語学を拓く』くろしお出版, pp.305-323.
- 澤田治（2006）「「はおろか」構文・「どころか」構文に関する意味論的・語用論的考察」上田功・野田尚史（編）『小泉保博士傘寿記念論文集 言外と言内の交流分野』大学書林, pp.243-253.
- 高橋圭子・東泉裕子（2019）「「勿論」考」『言語資源活用ワークショップ2019発表論文集』, pp.128-138.
- 竹内史郎（2007）「節の構造変化による接続助詞の形成」青木博史（編）『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房, pp.159-179.
- 鳴海伸一（2015）『日本語における漢語の変容の研究—副詞化を中心として—』ひつじ書房.
- 仁科明（2016）「助詞の史的変遷」中山緑朗・飯田晴巳（編）『品詞別学校文法講座5 助詞』明治書院, pp.271-297.
- 服部匡（2006）「「～どころか」、「～どころで(は)ない」とその周辺の諸表現—あわせて、「ばかりか、～はおろか」等との比較—」藤田保幸・山崎誠（編）『複合辞研究の現在』和泉書院, pp.169-196.
- 濱田敦・井手至・塚原鉄雄（1991）『国語副詞の史的研究』新典社.
- 藤田保幸（2013）「「～はおろか」の統語的性格と表現性—「～はもちろん」との対比において—」『日本言語文化研究』17, pp.1-18.
- 堀畑正臣（2007）『古記録資料の国語学的研究』清文堂出版.
- Cappelle, Bert, Edwige Dugas, and Vera Tobin. 2015. An Afterthought on Let Alone. *Journal of Pragmatics* 80 (4): 70-85. <https://doi.org/10.1016/j.pragma.2015.02.005>.
- Fillmore, Charles J., Paul Kay, and Mary Catherine O'Connor. 1988. Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of Let Alone. *Language* 64 (3): 501. <https://doi.org/10.2307/414531>.

付記

本発表は、JSPS科研費23K12192と「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」の成果の一部です。